

檀一雄のこと（その三）

————— 足利ゆかりの文豪

図書館係 阿部健治

檀一雄と言えば、その代表作は『火宅の人』である。この作品は檀一雄の遺作でもあり、1975（昭和 50）年 11 月に単行本として出版され、檀は翌年の 1 月 2 日に亡くなった（63 歳）。そして、その年の 2 月には読売文学賞を、6 月には日本文学大賞（新潮社主催：この賞の中で唯一の没後受賞）を受賞した。

しかも、この作品は檀自身を主人公（桂一雄という名前で登場）にした自伝的な小説で、五人の子を持つ作家が家を出て、舞台女優（作中では矢島恵子：実世界では劇団民芸の入江杏子）と同棲（もちろん不倫だ）するという刺激的な内容が現実とも一致していたため、大きな反響を呼び、150 万部を超える大ベストセラーとなった。1979（昭和 54）年には日本テレビでドラマ化され、1986（昭和 61）年には東映で映画化。恵子はドラマで好評だった原田美枝子が引き続いて演じ、映画の方は主人公の母親役（前回詳しく述べた檀の実母高岩とみ）を檀の娘である女優檀ふみが演じる（孫が祖母の役を演じたわけ）という興味深い配役もあって、大評判になったのだった。

この映画の影響か、1987（昭和 62）年には『NHK 特集 命もえつきる時 作家檀一雄の最期』（語り：草野大悟）が放送された。檀は 1975 年になると、肺がんが脊髄にも転移して激痛に悩まされる状態だったが、完成されないままになっていた『火宅の人』（この作品は連作長編で初回第一編「微笑」は 1961（昭和 36）年 9 月に発表、それから断続的に続編が書かれ、第 21 編「骨」は 1971（昭和 46）年 11 月に発表され、そのまま未完となっていた）を口述筆記で完成させようと苦闘する姿を取材したものだ。意識を保つため、痛みを和らげるモルヒネの治療を拒否して作品完成に命をかける作家の情熱に筆者はうたれ、これを録画した（この録画テープは長らく持っていたが、機器が DVD になるに及んで処分した）。もう昔のことなので忘れてしまったが、これをきっかけにして、『火宅の人』を読んだのではなかったかと思う。

「火宅」は足女生徒諸君には耳慣れない言葉だと思うが、仏教の経典（「法華経 譬喩品」）の用語で、「燃え盛る家のように危うさと苦悩に包まれつつも、少しも気づかずに遊びにのめりこんでいる状態」を指す。この題名には檀一雄の「自分は煩惱の火に焼かれ続けている」という思いが込められているのである。

『火宅の人』主人公の作家桂は、次男の次郎が 1955（昭和 30）年 8 月に日本脳炎を発症して重篤な障がいを負ってしまった時からちょうど 1 年後、1956（昭和 31）年 8 月 7 日に、昭和 22 年頃からずっと面倒を見てきた新劇の女優入江杏子と「事ヲ起ス（男女の関係になった）」。ただし、ずっと面倒を見てきたと言っても別に困っていたわけではない。檀は非常に面倒見のいい男なのだ。太宰の処女作品集『晩年』の原稿を預かって出版にこぎつけたのも檀だし、反社会的組織とトラブルって鬱病になっていた坂口安吾を自宅に呼び寄せたのも檀である。檀は郷里（福岡）が近い入江が上京して女優を目指すにあたり、劇団や仕事の世話を焼いたのである。檀は自分の子も 5 人いたが、母の再婚相手の子たちの面倒も見ていたから、多くの人間が家に入出入りするの普通のことであったらしい。その人たちの中には他にも女優の卵はいたようだし、入江も当初は特別の存在ではなかったようだ。しかし、舞台女優を目指す若い娘（昭和 22 年当時 20 歳）が、文学的才能に溢れ、大きくてあたたかみのある檀に憧れを抱くのは当たり前のことだ。この慕情は何年後かには、はちきれんばかりに大きくなり、それに応じて檀の気持ちも高まっていた。それでも、ずっとブレーキをかけたままの檀が、ついにどうにも抗しきれなくなって「事を起し」たのが昭和 31 年の事件だったわけである。この場面、作家は次のように描く。

発病一年、次郎がほとんど決定的な廢人に変わってしまったと云う抜きがたい憤怒。これらの不吉な出来事の連鎖に対する、恐怖と憤怒の入り混じった、甲

高い激昂のなかで、私は久しいこと優柔不断の恋情を抱き続けてきた恵子を、ハッキリと、旅（筆者注：太宰治の文学碑除幕式で青森に行く）に連れ出してしまったのである。誰にも打ち明けることの出来ない自分の憂悶に対して、自分から爆弾を仕掛けるような、狂おしい、無目的な、復讐であったとも云える。しかし、まさか次郎の発病が、恵子の出来事のほんとうの原因であったなどと、ここでためごかしを云おうとするようなつもりはない。情痴である。十年に亘る躊躇逡巡の不決断な恋情の総決算だ。ただ、次郎発病の日をわざわざえらび取るようにして出かけたのは、例によって、自分の運命を顛覆するふうの、私一人の、ひそかな陰謀であったかもわからない。

この除幕式に檀は入江と文芸評論家の野原一夫の三人で行っている。公的行事に新劇女優を伴えば目出つに決まっているが、なぜこんなに見え見えなことをしたのか。入江は檀が没してから 23 年後の 1999（平成 11）年に『檀一雄の光と影一「恵子」からの発信』という本を出版しており、その中でこの時のことを振り返っているが、それによればどうやら檀は入江のことを泉下の太宰に語りかけたようなのだ。これではもう「**純情な無頼派**」とでも呼ぶ他ないではないか。

1948（昭和 23）年に太宰治が死んでから、檀はもう一人の天才作家坂口安吾と特に親しくなった。檀は無頼派のアブナイ作家を放っておけないのである。しかし、その坂口も 1955（昭和 30）年に急逝してしまう（49 歳）。だから入江と事を起した 昭和 31 年には実は檀は大きな喪失状態の中にあっただのかもしれない。筆者は、『火宅の人』を読むと「無頼派が生き残ってしまったらっこうなる」というのを描いた書だと感じることもある。自分だけが残されたという癒やしよのない孤独感のようなものを感じるのだ。

檀は、自分の特徴は「過剰な体力」だと言う。太宰や安吾は「懊悩の果てに、観念の側から」人間なものかということを手探りで追い上げていくが、それが自分の「過剰な体力放散の狂態」と一見すると似ているだけだと自嘲するのだ。

私は動いていないと静まらない。行先が自分でもわからないから、これを妻君であれ、愛人であれ、一々告げるわけにはゆかぬ。知りたかったら、ついて来たらいいだろうと本気で云っているのだが、一二度珍しがって同行してくる彼女達も、しまいにはあきれてついてこなくなる。

何しろ、檀は思い立つと南氷洋に行く捕鯨船にも乗ってしまうような男（昭和 27 年、40 歳の時に 4 か月かけて行った）なのだ。妻は地味でおとなしい人だから早い時点でギブアップだし、入江は冒険を楽しむ方だがそうどこへでもというわけにもいかない。だから、檀は入江との逃避行を楽しみつつ、子どもたちと川に泳ぎに行ったり、庭木を掘り返して模様替えしたり、自分流の料理をたくさん作って人にふるまったりすることができないとストレスがたまってくる。これを「過剰な体力」というのである。

檀は入江と事を起してから半年は東京のホテルで同居した。家には五人の子がいるし、夫に死なれた母の面倒も見ている。だから檀はとにかく稼がなくてはならない。そこで、この時期、大量の随筆や中間小説を書いていたのである。檀は直木賞を受賞していて大衆小説の書き手のように見られているが、もとは 1936（昭和 11）年に第 2 回芥川賞候補になった（『夕張胡亭塾景觀』）くらいで、純文学を志向していた。だからこそ話題性もあるが、純文学的な趣も備えている『火宅の人』を自らの集大成として書いたということだろう。『火宅の人』はそういう彼なりの必然性をもった作品なのである。

しかし、長年の過酷な執筆活動と酒と煙草の習慣は、結果から言うと、この持て余すほどの「体力自慢」の男の体力を着実に奪っていった。『火宅の人』の中の「諸君はやがて、八十歳の破滅型を見るだろう」という予言はついに実現することはなかったのである。それは残念ではあるが、『火宅の人』という作品が後世に残ったことの意義は限りなく大きいと筆者は思う。

1995（平成 7）年には『檀』という本が出た。これは沢木耕太郎というノンフィクション作家が檀の妻のところに通って話を聞き、妻になりかわって書いたという希有の書である。多くの人の興味をそそり、こんなものを生み出させるというのは優れた文学のみが持つ力である。だから、これを完成させて逝った檀はむしろ本望だったのではなかろうか。筆者にしてもこんな面白いものを残してくれて、魅力的な人柄に触れさせてくれたことには感謝するしかない。そして、こんな駄文を書く機会を長く与えていただいたことにも心から感謝を捧げたい。